言の波

発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

参加と交わりの実現へ

―第四回　アシパ総会に参加して―

中村　満
小共同体推進室長

第四回ＡｓＩＰＡ総会が昨年11月、インドのトリバンドラム（ケララ州の州都・インド南西端にある）で開催されました。テーマは**「交わりの教会実現に向けての小共同体、基礎共同体」**。総会の期間は約1週間。午前、午後に亘ってプログラムが組まれ、ハードスケジュールでした。参加者は２７６名と多く、総会というより大会の様相を呈していましたが、インド国内から１８７名が参加しており、インドにおける小共同体・基礎共同体への取り組みの状況をうかがい知ることができました。3日～4日かけて会場まで来たグループが幾つもあり、その熱意、探究心には感じいるものがありました。休憩時間には、各国の取組み状況の把握、直面している課題、問題点などについての情報・意見交換なども活発になされていました。

今回、本総会に参加する機会を得ましたので、理解できた範囲内での考え、印象を述べさせていただきたいと思います。

参加する教会

小教区の活性化は、小教区を担当する司祭にとっては生涯のテーマであり、試行錯誤しながら日々探究していることです。「小共同体」に関わるようになって考えることの一つは、例えば「小教区教会論」のような視点で小教区で良く討議し、それを踏まえて具体的に実行に移す時期に来ているということです。組織的な面から、役割分担の面から、信仰養成の面から、福音化の面から、このテーマについておおいに議論し、小教区のあり方を探り具体化することが必要でしょう。アシパプログラムの中では「小共同体によって構成される小教区共同体」を理想的な小教区像として提示していますが、その具体的適用は各国の状況に応じたものになっていると思われます。会議に参加して感じたことは、それぞれに、歴史、文化、民族性などを踏まえながら理想的な小教区を目指し、知恵を出し合い、進んで行こうとしていることです。

交わりの教会

本総会は3年に一度開催され、これまでにタイのバンコクで二回、韓国のソウルで一回開かれました。今回の総会は四回目で、前述のテーマが選ばれました。十年余の時を経て、「参加」から「交わりの教会の実現に向けて」に焦点が当てられました。**教会はそもそも交わりです。**三位一体の神は交わりですし、小教区は当然交わりです。参加すると必然的に交わりになっていきます。参加する教会づくりを始めると交わりの教会づくりへと移行して行くでしょう。秘跡を通して、特に日曜日の典礼を通して、神と共同体との交わりを深め、また、み言葉を通して、神と共同体との交わりをさらに深めるようになっていきます。会期中に織り込まれていた小教区訪問は非常に印象的なものでした。日曜日のミサの典礼は当地の文化を良く取り入れたもので、奉納時には、祈りを添えた捧げ物を数人が捧げるようなことも行っていました。また、夕方になって砂浜で行われた基礎共同体の集まりでは、老若男女が集い、「みことばの分かち合い」を行い、その後の「愛の実践」として骨折した女性への治療費援助の献金が行われました。小さな子供たちが砂の上に座り、熱心に参加していた光景は未だに記憶に残っています。

福音化の未来は**「共同体」にかかっているのかも知れません。共同体が神との交わり、人々との交わりを生きるとき、福音化は現実のものとなっていくのでしょう。**

Q&A…「アジア・日本 小共同体事情」

Q．長崎教区では最近「小共同体」ということばを、あまり耳にしなくなりましたが、小共同体づくり推進はとり止めになったのでしょうか。

A．とり止めどころか、大いに推進しているところです。小共同体入門講座は、日曜日の午後を利用してカトリック・センターで3月まで開かれていて、30名ほどの方々が与っています。二つの地区（教区レベル）でも本格的にとり組みを始めておりますし、小教区・修道会単位でも徐々に動きを見せ始めています。

その一部については、カトリック新聞でもとり上げられています。

この運動は、仮に長崎教区が推進しなくなっても、日本の社会が、あるいはアジアなど世界の各地がとり組んでいくことになるでしょう。というのも、この動きは現代という時代の要請でもあるからです。

だれが言い始めたのか、いま「グローカル」というカタカナのことばを耳にするようになりました。これは「グローバル（世界的）」ということばと「ローカル（地方）」ということばを合わせたものです。

世界的広がりという大きな動きと、地方色を出していくという小さな動きとが同時に推進され始めたことを意味しています。

考え方を大きく広げて世界的なものにするには、同時に小さな自分の世界が活き活きとしなければならないことに気付きつつあるということでしょう。

生命体は無数の小さな細胞から成っていますが、この細胞活性化運動こそ、小共同体推進なのです。

いま「いじめ」ということばを聞かない日はないほどに、日本の社会はいじめ社会化しつつあるようですが、たとえば学校のクラスでいじめを止める唯一ともいえる手段も、「いじめはダメ！」と言える小さな集団をつくることであることに少しずつ気付きつつあるようです。

Q．小共同体というのは、何人かが集まってみんなで聖書を読むことではないのですか。

A．「聖書の分かち合い」は小共同体活動を推進していく上で、最も大切なことです。車でいえば、エンジンの役割ということになるでしょう。神さまのみことばを直接味わい、ちょうどご聖体のパンを分かち合うように、これをみなさんと分かち合うことによって、エネルギーをいただくのです。

みことばの味わいと分かち合いを進めていきますと、ちょうど食べ物を摂ると体が大きくなるように、自然にその小さな共同体が成熟していきます。そして、自分たちが活き活きとなるだけではなく、周囲の社会も活性化されてくるのです。

福音書に出てくるパン種のたとえ話とかパン増やしの奇跡と同じことが現実に起こり始めるのです。

Q．小共同体が成熟すると具体的にどんなことがなされるようになるのですか。

A．具体的に一つひとつ取り上げるとキリがなくなりますが、実際にこんな例があります。

ある小共同体の集まりに、寝たっきりの姑を付きっきりでケアしている、ひとりの主婦が参加していました。そして、自分は家族がそういう状況なので、小教区の活動に参加できず、日曜日のミサにも与ることができず、教会活動に協力できないことを、みなさんに対してお詫びをしました。

これを聞いたみなさんは、最初は、ミサに行けなくてもそれは正当な理由があるから罪にならないとか、そのような状況の場合は例外的にゆるされるなど、どちらかというと管理的教会の雰囲気が漂よっていました。

そのときです。ある方がこんな発言をしたのです。「あやまらなければならないのは、わたしたちの方ではないかなぁ」と。

近所にこんな家庭があるのに気づきながら、これまでそこを素通りしてきた自分たちは、確かにミサにも行き、教会活動に参加しているけれども、それはほんとうの信仰を生きているということになるのか。こんな堂々たる問題が分かち合われるほどに、この小共同体は成熟していたのです。

「そうしたら、今度の日曜日はわたしたちがおばあちゃんの面倒を見るから、ミサに行って来んね」というような意見が出て、早速実行したというのです。

その他に、これは隣りの韓国での話ですが、小神学生もこの小共同体を中心に育成するようになり、小神学校という実際の建物を備えたやり方は、しなくなったという話もあります。

ただ、あまり背伸びをしないことが大事です。すべての人に神さまから与えられた才能があることを前提として、これを隣人のために大いに発揮することを、「みことばの分かち合い」から学ぶことができれば、おもしろくてたまらないほどの活動が、できるようになるでしょう。

Q．アジアの教会は小共同体プログラムをとり入れて、非常に元気になっていると聞きましたが・・・・。

A．第一面に記されているように、アシパ（アジアの教会における総合的司牧）プログラムが力強く進められています。そして、志しを同じくする人々が集まって総会を開くまでになっています。今年はインドで15カ国の方々が集合しました。

その背景には、世界的に見て、比較的貧しいアジア独特の社会状況があって、そのことがこの運動を推進していることもあるようです。

これはカトリック教会の小共同体運動とは直接何のかかわりもありませんが、昨年ノーベル平和賞を受けた、バングラデシュのグラミン銀行総裁ムハマド・ユヌス氏が見ている世界もまた、小共同体を基礎としたもののようです。

ご存知のように二十世紀、平等を目指した共産主義経済が破綻しました。

自由を基にした資本主義経済も、行き詰まりを見せ、二十一世紀には破綻をきたすとも言われています。

ユヌス氏は、人間と人間がつくる共同体に基礎をおいた、経済の再生を目指しておられ、徐々に各国に広がりを見せています。

その共同体は5人を単位とした小共同体だそうです。まさに小共同体経済の到来を予感させます。

アジアに小共同体運動が受け入れられるのには、こんな文化的背景もあるのかもしれません。

ひるがえって日本はいま、精神的貧困の時代に入っています。形は違え、人間に基本をおいた再生プランを推進することは、時の要請であると言えるでしょう。

そして、これをしかけることができるのは、さまざまなしがらみや利権とは無縁の宗教団体、とりわけカトリック教会であると言えないでしょうか。

新しい要理

「共に歩む旅」（4）

第二課「神の呼びかけを受けているわたしたち」

［進行係］（参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める）

「一人か二人の方が祈りで神さまをこの席に招いてくださいませんか。」

（誰でも自由な祈りを捧げるか、以下の例文で祈ってもよい）

・主よ、この席に来て私たちと共にいてください。

・愛である神よ、私たちがあなたの愛を感じることができるように助けてください。

A．私たちの生活

私たちはなぜ信者になりたいのか、あるいはなぜ信者になったのか必ずしも説明できません。しかし神は常に色々な方法で私たちを呼ばれます。神の呼びかけに対する私たちの反応もいろいろな形で表れます。

［進行係］

「次の写真を見ましょう。」

［進行係］（参加者たちに質問する）

①「この写真の人々がどんな思いを持っているか推察してみましょう。」

②「近くの親しい知り合いや友人、隣人に教会に通う人がいますか。彼らの姿を見ながらどんな考えを持ちましたか。」

（一組対話を交わしてから全体の集いで発表する）

B．神のことば

イエスが最初の弟子たちを呼ばれる場面を分かち合います。

［進行係］「どなたかマタイ4・18-22（四人の漁師を弟子にする）を読んでくださいませんか。」

……聖書を読む……

「他の方がもう一度読んでくださいませんか。」

［進行係］「次の聖書の句を一人ずつ祈るような心で読んでください。

（同じ句を3回繰り返して読む間、他の人々は沈黙を守ります）

「私について来なさい」3回

「網を捨てて」3回

「イエスに従った」3回

［進行係］（参加者たちに質問する。）

①「イエスは自分に従おうとする人々に何を要求されますか。いっしょに調べてみましょう。」

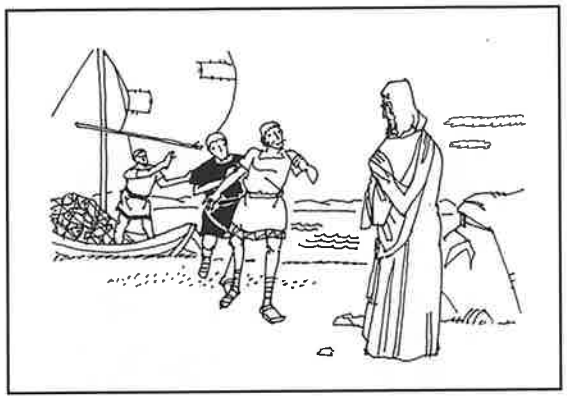
（20-22節を参照してください。）

②「彼らはなぜ網と船を残してイエスに従ったのでしょうか」

「イエスがその昔、弟子たちを呼

ばれたように、今私たちを呼んでいらっしゃいます。イエスは私たちの痛みを癒してくださり、本当の人生を生きていくように私たちを呼ばれます。」

イエスはこれを聞いて言われた。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」（マタイ9・12-13）



【参考聖書】
＊マタイ9・9-13・・マタイを弟子にする
＊ルカ5・27-32・・レビを弟子にする
＊ルカ14・25-33・・弟子の条件

C．さらに一歩進んで旅を続けよう

弟子たちはためらわないで、自分のすべてのものを捨てて、イエスに従って出かけました。彼らはイエスを通して本当の人生の道を見出したからです。イエスは今日私たちにも「私について来なさい」と招いておられます。そのかたは私たちを真理の道に導かれるのです。

【進行係】（参加者たちに質問する。）
①「イエスはどのように呼びかけられていると思いますか？」
②「イエスに従おうとする時、私が捨てなければならないものがありますか？　あるとすれば、それは何だと思いますか？」（一組対話を交わしてから全体の集いで発表する。）

【進行係】「皆といっしょにお祈りの練習をしてみましょう。」
①隣りの人と向かい合って、お互いに手を取ってから目をつぶります。
②隣りの人の中にイエスがおられると考えて「主よ」と呼んでみます。
③私が主にお願いするのは何であるか、しばらく考えてみましょう。そしてそのことをことばで表現してみましょう。
④祈りの最初は「主よ」、「愛である神よ」、「神よ」、「慈悲深い神よ」などで始め、祈りの終わりには「アーメン」と唱えます。
各自、自由に感謝の祈りを捧げて集いを終わります。

【進行係りの心得】
＊参加者が弟子たちと自分たちをすぐに重ね合わせることができるかどうかに留意する。
＊すぐにことばで表現できなくても心配はいらないことを説明し、安心感を与える。

【覚えましょう】（1～6は第28号）

7．聖書は誰が書きましたか
＊聖書の「原著者」は確かに神ですが、実際に人間に理解することが出来るように書き付けたのは人間ですから、ある意味では「人間」も著者だと言えます。

8．聖書はいくつの書から成っていますか
＊旧約聖書は46書、新約聖書は27書から成っています。

9．旧約聖書の成立過程と構成はどうなっていますか
＊旧約聖書は紀元前１０００年～紀元後150年まで約850年にわたって記録され、律法、歴史書、預言書、そして知恵文学（詩編も含む）から成っています。

10．新約聖書成立過程と構成はどうなっていますか
＊新約聖書はイエスのみ言葉と救いの業である宣教活動を著述した「四福音書」と使徒たちの宣教活動を著述した「使徒言行録」そして、「書簡群」と「ヨハネの黙示録」から成っています。

日本の教会の現状、課題、展望（6）

溝部　脩　高松教区司教

8．長崎教区が果す役割

①　伝統がある教区です。

皆さんの教区は日本の教会にとって、とても大事な教区です。何度もこれを繰り返して申しましょう。それはやはり400年の間信仰を守り続けたその伝統の深さにあります。伝統に裏付けられた奥の深さがあり、そしてしっかりとした背骨のある信仰心が根付いています。他の教区と比べると、それは一際目立っています。しかし、伝統あるところには気をつけないと刷新に疎くなる恐れがあります。今まで信仰を真に守ってきた教区だけに、開かれることに抵抗とむつかしさがあるように見受けられます。それをどのように克服していくかは、長崎教区の今後の課題でしょう。この度、信徒使徒職評議会が解散するということですが、新しい組織を作るとすれば開かれたものにする必要があります。現代、日本の教会は世界に向けて、日本国内に向けて、小さな者、貧しい人とともに歩むということを宣言しています。長崎の教会は世界に向けて、兄弟である日本の教会に向けてどのようなメッセージを発していこうとしているのでしょうか。どんな教区であってほしいのか、やはり真剣に考えて頂きたいとつくづく思う次第です。

高松教区のような貧しい教区に居ますと、皆さんが羨ましくて仕方がありません。私が高松教区に赴任したとき、教区司祭は4人だけでした。そのうちの3人は82歳でした。その3人とも今年引退しました。最後の一人は64歳です。その4人は全員長崎教区から頂いた人たちでした。後は全て外国人の司祭です。そんな状況で司教は何ができるというのでしょう。私は皆に頭を下げて助けてくださいと言うよりほかに方法をもっていません。長崎教区から一人、大阪教区から一人、サレジオ会から二人の司祭を借りまして、2カ月前冗談のようにして四国高松教区日本人会なるものを結成しました。現実は厳しいのです。非常に恵まれた長崎教区はどのような形で日本の他の教区を、世界の他の教会を助けることができるか、真剣に考えてもよいと思っています。完結型の組織を作っていかないようにしてほしいものです。

②　霊性

この点についても、長崎は発信地になることができます。私たちのような新信者と違って長崎には深い信仰心があります。私は長崎に来て働くようになるまで長崎の信仰ということは分かりませんでした。家族で始めて洗礼を受けたのが私でして、どんなに家庭でロザリオを唱えるかとか、毎日ミサに家族全員で与るとかは分かりませんでした。長崎に来て信仰の本質のようなものを肌で感じたといっても大げさではありません。私は長崎にたった2年半しか生活できませんでしたが、長崎に働いた時は毎日が嬉しくて仕方ありませんでした。長崎の地に染み付いている伝統ある信仰心はカトリックの霊性を確かに伝えてくれています。

長崎は殉教者の土地でもあります。現在、殉教者の列福調査が最後の段階にきています。日本から送られた資料はローマで検討されています。いま教皇庁に設置されている歴史部会の審査を終えて、神学者部会に回されています。神学者部会は2ケ月以内に審査をしなければならないという規定があるので、間もなくその回答は戻ってくるはずです。それから要約の要約がつくられて、それは担当の枢機卿たちに回され、枢機卿会議が開かれます。枢機卿会議をパスすると教皇様の所に決義が回され、教皇様が、これらの人たちが福者であると宣言する「教令」を発布してことが終わります。もはや私たちはこの最後の段階、すなわち枢機卿会議と教皇様が発布する「教令」を待つのみとなっています。私は最後に今年中に再度ローマを訪問し、お願いにあがる予定です。更に「教令」が発布されると、どのように列福式を行うかの打ち合わせのために再度ローマに行かなければなりません。私も年をとってきていて、旅行はかなりつらいのですが、それも日本教会のためとあれば、喜んでお捧げす

るつもりです。

列福式は日本で行われる可能性が高いこともあり、その候補地を決定していかなければなりません。蓋然性が高いところとして長崎が挙げられています。ことがこのように進む中で、西坂でだれとだれがどのように殉教したという冷たい歴史ではなくて、一人ひとりの殉教者が、現代にどんなメッセージを投げかけているのかを伝えることの方が大事です。長崎は常に殉教者に対しての興味がありましたし、殉教祭その他で殉教者を崇敬してきました。しかし、単に殉教者を称えるための祭りでしたら、少し程度を高めて彼らの生き方を称える運動にすることで十分でしょう。長崎の地に流した彼らの血は、今生きている私たちの教会に何を訴え、何を求めているのでしょう。殉教者が生きた当時の日本の教会は模範的な教会でした。宣教心に溢れた教会でした。16世紀には日本から多くの日本人宣教師が東南アジアに旅立って行きました。現在の日本の教会はそれに比してもらうことに馴れた教会となっていて、司祭にべったりの教会の姿を見せています。キリシタン時代、司祭なしの教会は300年間信仰を伝えつづけました。それは何に起因するのでしょう。信徒が責任をもって教会を守りぬいたからです。長崎では信徒の時代をとっくの昔から実行していた、先駆的な教会でした。こんなことを考え合わせ、自分たちの先達が生きてきた伝統を調べ直して、その中で純粋に伝えられた〝霊性〟をきちんと理解して頂きたい。

長崎には祈る教会があります。一本信仰の筋が通った教会は長崎以外にないと言っても過言ではありません。他の教区では、新しい信者が大多数であり、一本筋が通った信仰を彼らに要求するのは困難です。神父になった私でさえ、長崎に来なければ分からなかったことが多かったということを考えれば、私が言っていることをお分かりになれるでしょう。生きた信仰、霊性を伝える発信地となるのは長崎をおいて他にありません。長崎教区は、日本の教会の霊性を高めていく運動の発信地になってほしいと思います。

③ 最後に

長崎教区は伝統があるので、自分の伝統に固守して周りを見失う恐れがあるといったことを述べました。他の教区が苦労して模索し、努力している現実が見えなくなる恐れがあります。それだけに、大司教様を中心として一つの新しい体制作りに向かっているこの時を大事にしてほしいと思います。島本大司教様が出したその線が今活かされようとしているのであって、決して退歩してはなりません。

伝統と個々の特色を活かしながらも、大局をよく見据えて、必要があれば自分の伝統を脇においてでも、力を結集して、次の時代に向かって歩んでいくということが長崎教区の皆さんに求められていることなのです。

もう一度繰り返します。二本の柱のことです。

①一本筋が通るキリスト教の理解を自分できちんと整理する。

②それができるためには、何よりも人に対しての深い理解、暖かさ、愛情が必要である。

このことを何度でもご自分に言い聞かせてください。**これがあるところに教会があり、これがあるところに宣教があるからです。**

溝部司教の**「日本の教会の現状、課題、展望」**は今回で終了いたします。バックナンバーを掲載いたしますので、参考になさってください。

第24号
1．問題提起
2．ポストモダンの時代

第25号
3．キリシタン時代よりの考察
①「ナツーラ（自然）」に即した生き方が人間の生活の基本
②不自然の教えを強調するキリスト教は受け入れられない
③自然の理による倫理的に正しい人は圧倒的に多い
④教会の適応への批判

第26号
4．現代的考察
①世俗主義
②自然教の問題点

第27号
5．国体との関係
6．明治政府の宗教の定義

第28号
7．日本の教会の大きな潮流
①社会への挑戦
②霊性を深める
③組織化に向かう

第29号
8．長崎教区が果たす役割

＊第27号での**「山折伏雄の『さ迷える日本の宗教』」という本は、「山折哲雄『さまよえる日本宗教』」**の誤りでした。ここに訂正し、お詫び致します。

聖書豆知識

共観福音書について・・

Q. **マタイ福音、マルコ福音、ルカ福音を総して「共観福音」と呼ばれることはよく知っています。確かにその三書を読み比べてみると、内容や構造などにかなりの類似性があると思われます。しかし詳しく読んでみると、三福音に共通している話もあれば、二福音に共通の話もあり、各書に固有の話もあるようです。そこで共観福音の成り立ちと関係について、どのように理解すればよいか教えて下さい。**

A. 仰るとおり、共観福音書は多くの類似性を持っています。特に取り上げられている話には、共通しているものがかなりあります。例えば、「種まきのたとえ」は共観福音の全書の中に収められています（マタイ13・1-9、マルコ4・1-9、ルカ8・4-8）。しかし「山上の垂訓の幸い」は、二つの福音にしか見られません（マタイ5・3-12、ルカ6・20-23）。共通していない話、例えば「施し」の話はマタイ（6・1-4）だけ、「マリアの賛歌」はルカ（1・46-56）だけという具合に、各福音書に固有のものもあります。**そこで共観福音の話は三つのグループに分類できると考えられます。① 三福音全ての福音に含まれるもの、② 二つの福音に含まれるもの、③ 各福音にしかないものです。**

そこで調べてみると、マルコ福音（以下、マルコとのみ表記）の中の話はほとんど、他のマタイやルカにも含まれています。逆にマタイやルカの約半分はマルコに共通の話で、これらが三福音全てに含まれているわけです。しかも三福音共通の話は、しばしば使われている単語も共通であることが多く、また時にはその語順さえ同じということもあるのです。他方、二福音に共通の話は、全てではないにしてもそのほとんどがマタイとルカに見られ、これらの福音の約4分の1を占めています。そしてその多くは共通性を持ってはいますが、その語順は全く同じというわけではありません。単独の話については、マタイとルカにそれぞれ見られますが、これらはその福音記者に固有の話と言えます。その割合について言えば、マタイとルカの全体の4分の1よりも若干少ないくらいです。

だから結果として、マタイとルカに見られるマルコの話は、マルコの秩序に従っているという事実から、マルコがそれら共通の話をマタイとルカから抽出したと考えることは難しいことになります。むしろ逆にマタイとルカが、マルコが記述していた話に、さらに幾つかの別の話を付け加えて、構成されたのだと考える方が理に適っていますし、容易であると言えるでしょう。つまりマタイとルカに対するマルコの優越性が、そこには認められるということになるのです。もしマルコがマタイとルカからコピーしたと考えるならば、マルコは両者に共通の話を選択しなければならなかったでしょうし、しかもそれらは全て同じ秩序を有していなければならなかったはずです。どうしてもこの考え方には無理がありますし、まずあり得なかったとはっきり断言できます。それ故に、マタイとルカの方が、マルコから抽出した話を自らの福音に利用したということになります。

上の結論をもとにマタイとルカの共通点を考察するならば、両者は互いにコピーし合ってはいないということになります。もし両者がお互いに依存し合っていたならば、共通の話が共通の秩序をもって多く含まれていたはずですが、結局そうではありません。共通の話題ではあるにしても非常に異なった方法で叙述されており、各々がその叙述の仕方に対して自由性を持っています。だからその両者は何かまたマルコとは別の資料を共有し、各自がその中にある共通の話題を取り上げて、自由に話を構成し、自らの書に収めたのでしょう。さらにその後、各自に固有の話が付け加えられたのです。こうして、共観福音書が成立したのです。

しかしこれまで述べてきたことは、あくまでも仮説の域を出ません。また、マタイとルカに共通の資料（原典）が、今日において存在しているわけでもありません。けれどもこうした説が、多くの学者の間では支持されていて、共観福音は主にマルコともう一つ別の資料を中心に構成されたのだろうと考えられているのです。私たちはこの説を、「二資料説」と呼んでいます。また第二の資料のことを、「Q資料」と名付けています。この「Q」は、ドイツ語Quelle（「原典、起源」という意味）の頭文字から取られています。

もう一度繰り返しますが、この説には明確な確証があるわけではなく、共観福音を分析研究して導き出された仮説です。

（湯浅　俊治）

昼下がりのバスの中、乗客は三人。

小さな路線バスは、乗降客のいないバス停を次々と通過し、「時間を調整します」と、バス停でもない所で止まり、更に二つ通過し、三つ目のバス停で止まって、手を上げていた人を乗せる。

乗り込んで来たその人は、テレビで良く観る女性の漫才師ばりのファッション。

およそ、田舎の路線バスには似つかわしくない雰囲気。

ー乗客は四人になったー

“優しい運転手さん”は、その人が座席に座るのを確認して発車した。と、やおら　大きな声。

「このバスは営業所行き？」

「えっ！！営業所には行きませんよ」

「あらー！どこ行きやろうか？わたしゃ駅に行きたかとにぃ」

「駅には行きますよ。ターミナルでしょ。どのバスも必ずターミナルに入って、それから行き先に向かうとです」

「そう。そんなら良かけど。バスには全然乗らんもんけんで、ようわからんと。親切か運転手さんな“間違えた”と言えばすぐ止めて降ろしてくれるとけど、意地悪か人は、規則ですからて、言うて、降ろしてくれんもんね」

運転手さんは何も応えない。すかさず一番前の座席の女性が応戦。

「わたしゃ、ＪＲより、バスばっかり、バスがよかぁ、ＪＲは階段ばっかりで、上ったり、下ったり、足のきつうして。その点バスは目の前に止まってくれるけん。どのバスでん駅に行くこたぁ知っとるし」

ふ・ふ・・・笑いがこみ上げて来る。

「階段と言うても、こんな田舎の階段は大したこたぁなか。東京に行ってごらんなさい。どこへ行っても階段。地下鉄を利用すると又階段ですよ。上ったり、下ったり・・・」

途中からは、言葉も東京弁が・・・。

「東京には娘が二人おりますけん、東京の街はよう知っとっと。孫が生まれたけん、行くつもりやったとに。足ば捻挫して、今リハビリ通いですたい」

ー二人の口戦は続くー

「早く治してお行きなさいませ。東京はどんどん変わっていますよ。行く度に変わっていますよ。・・・箱根もいいですよー」

「箱根は息子が独身の時、よう連れて巡ってくれたですもん・・」

どちらも引かない。益々熱くなる様子。

「福岡にだって、高速バスを使って一時間半もあれば行けちゃうし・・・」

「小倉まででん、二時間もかからんで行くけん高速バスばっかし。着いたら息子のマンションまでタクシーでサァーッと・・・」

ラメ入りのジャケットを着た人が、“駅”で降りた。

ほんの十分足らず。偶然乗り合わせた行きずりの二人と私。

二人の席は一番前と中央より後ろ。二人共前を向いたままの姿勢でやりあった。先に降りて行く人は側を通るのにもかかわらず、やり合った相手には一べつもくれず。“全然乗らない”筈のバスなのに・・・。なぜか慣れた身のこなしで“バスカード”を料金読み取り機に“サッ”とかざして。降りた。

ー静かになったー

年の頃は二人共同じくらいに見えた。リュックを背負い、捻挫のためかステッキに手を添えた彼女はどこまで行くのだろう。私が降りる時も、そのまま乗っていたが・・・。

その時は可笑しかった二人の“口戦”も時間が経って思い出すと、切なさも感じてしまう。齢を重ねる事は“悲哀”だけではない筈だけれど・・・。

（内田　富美子）

「ザビエル年」終わる・・・

長崎教区では、宣教年間「ザビエル年」として聖フランシスコ・ザビエル生誕500周年を祝った。去る12月2・3日は閉年行事「平戸ザビエル祭」が平戸に於いて行われた。今回は、それに参加された方にいろいろと伺ってみた。

★2日間行われたと伺いましたが何があったのですか。

12月2日には平戸市主催のオペラ「ザビエル」が公演されました。これは、オペラ専門家の方々と地元・平戸の一般市民の方々が出演して、ザビエルの生涯を描いたものでした。

続いて3日は、「ザビエル年　閉年ミサ」が行われました。1550年7月、平戸にザビエルが訪れ、その後翌年にかけて3度平戸を訪れており、ザビエルにとってこの平戸はゆかりの深い地となっています。そこで、この地に入る時に利用したであろう平戸港の交流広場に集まり、ザビエル像を先頭にミサが行われる文化ホールまでを巡礼し、その後、ミサが行われました。

★オペラ「ザビエル」の感想をお聞かせください。

ザビエルが一人の日本人と出会い、日本への宣教を決意し、この日本でザビエルがどんな体験をし、どんな思いで過ごしたのかをこのオペラは良く表現していたと思います。

隣りに座っておられた方も、知り合いが出演しているので見に来ました、とおっしゃっていましたが、何よりも、市民参加型を取ったことで、より多くの方々（非信者も）からの協力が得られ盛り上がったのではないかと思っています。

平戸地区のある神父様が公演が終わって、控え室にご苦労をねぎらいに入って行かれると、信者でない出演者8名の方が神父様の所へ行き「祝福をお願いします」と言われ、祝福を授けられたという話を伺い、胸が熱くなりました。

この「ザビエル」のオペラを通して、人々の心に宣教の種を蒔くことができたのではないかと思いました。

オペラ「ザビエル」の一場面

ザビエル（中央）ヤジロウ（左上）

★「閉年ミサ」はいかがでしたか？

2時に平戸港交流広場に集まり、祈りをしたあと、冷たい風が吹きぬける中、平戸地区の信者さんたちと東京・広島・長崎からの巡礼団と一緒に、ザビエル像を先頭に、ロザリオを祈りながら歩きました。文化センターに着くと、長く歩くことが難しい方々などが祈りのうちに待っておられました。

3時からのミサは高見大司教様司式のもとに行われました。特に印象に残ったのは「エッファタ（開け！）」の式が行われたことでした。まず、「ことばの典礼」の前に、みことばを聴くために「耳を開く式」が行われ「エッファタ！耳を開きなさい」と司教の祈りがあり、続いて司祭がザビエルの生涯から取った祈りを行ったあと、司教が「私たちも耳が開かれ、今から語られる神のことばを聴き、神との出会いを実現しましょう。」と祈り、書簡の朗読へと続きました。また、「感謝の典礼」の前に「目を開く式」、「派遣の祝福」の前に「口を開く式」が行われました。ミサの最後には、代表者と全員による「決意表明と宣教宣言」があり、私たちがこれからはもっと、宣教の使命を生きる者となるよう派遣されました。

＊以下はその宣教宣言文です。

「わたしたちは今、ザビエル渡来450年祭から今日まで、それぞれの立場に応じて、それぞれが与えられた場所でキリストの福音をどのように宣べ伝えてきたのかを振り返りました。ただわたしたちはこれまでそのために派遣されているという自覚が無く、漠然と過ごしていただけでした。そこでこのミサの中でみことばと聖体によって心とからだを癒され、またこれから自覚と決意を持って新たに宣教への旅をはじめます。どうぞ、わたしたちを宣教の使命に目覚めさせ、キリストの福音を全世界に告げ知らせるために、あなたが望まれるところ、わたしを必要としている場へ遣わしてください。わたしは喜びと勇気を持ってあなたのみ旨を告げ知らせます。」

宣教委員会より…

新しい時代の「祈りと交わり」

―アジア宣教大会に出席して―

昨年ほど「命」の尊さが日々語られたことはなかった。国内での子ども同士のいじめ、我が子に対する虐待、大人の自殺、イラクでの自爆テロ、インド洋大津波による人命と家屋の流失等など、さまざまな暗いニュースは、現代人の生きることの意義、人間の生と死の尊厳、その重さを考えさせ、神へ祈る一年であった。

アジア版「宗教と文化」フォーラム「第一回アジア宣教大会」は、タイのチェンマイで開催され「アジアにおけるイエスの物語」をテーマとして五日間、（昨年10月18日～22日）参加者千人の信仰体験の分ち合いが、同一ホテルを会場に、大規模な国際会議の雰囲気で行われた。アジア27カ国から70人以上の枢機卿と司教、約３８０人の司祭、約４００人の信徒、それに欧州、中南米からの代表団。日本からは司教団代表として東京、大阪、長崎の三教会管区から、菊池功司教（新潟教区）野村純一司教（名古屋教区）郡山健次郎司教（鹿児島教区））はじめ司祭3人、修道女2人、信徒14人の合計22人が派遣された。長崎教区からは教区ご指名で井出義美氏（飽の浦教会）と下名の二人が出席した。

会議の雰囲気、分かち合いの模様はカトリック新聞（10月29日、11月5日付、一面）で参加者の意見も入れて既に詳細報告されているので此処では重複を避け、私の印象と今後への期待を記すにとどめたい。

先ず（1）今何故アジアの宣教者が一同に集い分ち合いの場か？　団長の菊池司教によれば、「アジアはこの種の分ち合いが遅れている。教会は地域化の傾向にあり、新しい時代の分ち合いの在りようが問われている」と。バチカンの地方分権版であり、グローカル時代（グルーバルとローカルの並存）の到来である。

（2）アジア各国の文化と宗教は歴史的、伝統的にその多様性が特徴であり、強みでもある。この種の大規模な大会は参会者の満足度、高揚度はあるものの真の宣教活動に資するには各国、地域、教区の日常的な活動といかに連携し実践するかが課題である。アジアにおけるカトリックのマイノリティ（少数）を地域ごとに如何に克服し交わるか課題は重く、特に言語の壁は厚い。

（3）アジアにおける日本の役割は何か。体験論的には技術立国・経済大国日本は、リーディングカントリーとして指導的役割を実践し、それなりの評価を受けてきた。心の世界で日本はリーダーシップを如何に発揮できるか。極めて個性的かつ普遍的な課題である。日本の聖職者が過去の歴史認識に立って真の分ち合いができる日を期待したい。

（4）新しい時代の動きが貧困と戦火と分裂の代償としてアジア各国、地域に台頭してきている。キリストは平和をうながす。そしてキリストは敵意を滅ぼし和解を達成された。（エフエソの信徒への手紙）平和と心の安定を希求しアジアの心を直視し大事にしたいと考えさせられる会議であった。「教会は活力を与える聖地であり、幾多の命の危機を乗り越えてきた自分がある。他宗派の人々との対話が大事です」と言ったバングラディシュの若い信徒のまなざしが印象的だった。

（5）３００の寺院、若い僧たちが裸足で托鉢巡礼する街チェンマイ、帰りの機内で隣席で乗り合わせた黄色の法衣に身を包んだ高僧との会話に話が弾み、交換し合った手持ちの和英辞典と、2万部作成したという高僧自著のタイ語の経本（どなたか翻訳してください）を前にして、新たな時代の祈りと交わりの実践を思慮している。

本会出席の機会を与えくださった教区関係者、ＦＡＢＣ（主催者…アジア司教協議会連盟）の心暖まる配慮に感謝申し上げる。

宮田隆（島原・雲仙教会）

生活の中の教会

青方教会　　フォトプラン　山本 富夫

青方

中通島の青方郷、区画整備された「永田」の地に建つ教会堂。

モダンな聖堂は、二〇〇〇年・大聖年の夏、建立され、一昨年、小教区として独立した。

青方に最初の教会堂が誕生したのは、一九七五年、近隣からの転居が相次ぎ、献堂時には七〇余戸がいたという。

その後、青方は周囲の町々の要衝となり、中心となった。

新しい時を見極めた叡智は、上五島地区カトリックセンターを併設し、青方教会堂を完成させた。